

第一回研究会のあり方検討委員会

日時：2010年2月6日（土） 14時～17時

場所：聖心女子大学 ブルーパーラー

出席者：居城・大槻・土居・池田・本間・山根・村尾・伍・橋本・榊原・今井・伊東・逆井・柚木・楠本・高村・鶴沢

1. あり方委員会発足までの経過報告

役員の担い手不足、労働者の会員が高齢化などのため、12月12日運営委員会であり方委員会を発足させることを決定、1月に周知する。欠席者からも2名意見をいただいている。

2月末までに意見を伺い、3月14日企画運営員会で話し合い、5月か6月にもう一度お集まりいただき、話し合いをし、まとめていきたい。

2. 現状

- ・会員の平均年齢の上昇
- ・労働者会員の減少
- ・新役員の候補者が不足
- ・サブ研の活動も低迷

3. 寄せられた意見

- ・会費を値下げしたらどうか。会誌が年一回なのにな変わっていない。非正規労働者も増えている。
- ・研究者と労働者という二項対立的な考えを止めた方がいい。
- ・各学会がジェンダー関係のプロジェクトを立ち上げ、出版物も増えている。企画も似ている。若い研究者がそちらに取られている。若い研究者を引き付けることが困難。
- ・非正規労働者が増え、若い労働者の人を組織化することが困難。会員勧誘が難しい。出来る範囲で、誰でも参加できる会にしたらどうか。

4. 会場での意見

- ・研究会がもっと現在の労働者の動きに即した研究ができればと思う。
- ・兼松原告として、ペイ・エクイティなど理論的なことが職場や裁判、自分たちの抱えている悩みと直接結びついた。
- ・ここ数年感じていたのは、会員としての恩恵を受けていることを感じられない。難しくて例会・セミナーに行ってもわからないという話をあちこちから聞く。活動が見えない、

と感じる。非正規労働について考える研究者や労働者、法曹関係者で作る会も生まれている。これまでの意義は感じているが…。

- ・編集委員長をやっている。読者のときは生協で働いていた。NGOの専従を経て大学院生となる。森さんや木下さんの勧誘で入会。変化の多い時期を過ごした。自分のように研究者か労働者かわからない人もいる。混在性。組織労働者対定職のある大学の研究者ということではなくなっている。むしろ、存在意義は高まっているのではないか。現場の意見を聞き、理論が練磨され、理論を学び現場に持ち帰るということはこの場に限り重要。これまでの歴史を考えれば、ほかの場でなく、ここを引き継いでいくことに意義あるのでは。会の運営にかかわりたいと思っている人もいるのでは。呼びかけてみてはどうか。選挙もいつも結果のみ発送。(会誌の遅れた理由) どういうメッセージとして会誌を発行するのかということも意見を伺いたい。
- ・会の初めからいる。生活の一番の拠り所。最近さみしいのはサブ研ができないこと。研究例会などは必ず出席。定年になって10年、ほかのことをやらず勉強に専心。生活と福祉の研究会ではずいぶんそれを生かすことができた。皆さん研究や職場、家族のことで忙しく出られなくなって、開かれなくなった。60歳代の間にほかに顔を出しておけばよかったと思うほど。研究をする仲間がほしいということで、(会が) どの方向にいても構わない。島津さん宅で1951年ごろ会の活動が始まった。
サブ研の成果が会誌に発表できたらよいと思う。これから若い人のお手伝いをしたい。
- ・イギリスの労働史が研究テーマ。90年代フェミニズムと労働運動をテーマに連載があったことが魅力だった。非正規労働も重要だが、幅ひろいテーマも取り上げられることも大事に思う。イギリス女性史研究会を立ち上げ、続けている。面白いテーマをやると皆が来るという自信はついた。1992年のシンポはよかったということがあるので、思いっきり起爆剤になるようなことをやったらどうか。持てる者と持たざる者、ということより包摂と排除が流行りのテーマ。どう結び付けるかを考えている。非正規労働とほかのテーマをどう結び付けるかも大事ではないか。役員はやってくださる方がいないかどんどん声をかけた方がよい。意外な方がやってくださる場合があると思う。
- ・一昨年運営委員をやっておいたところ。財政問題・活動低迷になり始めた時期に役員として関わる。今は定年になっているが、現役のときもっと勉強し、知識を吸収すればよかったと思う。女性労働問題をトータルにとらえ、取り組むことにこの研究会は重要ではないか。どういうテーマを投げかけるか、それによって人が食いついてくる。サブ研活動の充実も重要。規約の見直しも意見交換が必要では。
- ・10年前には事務局長、代表をかねて活動した。今井さんと伍さんに同感。サブ研の活発化をどうしたらいいか。この活動の成果を持ち寄ってそれを会誌に載せていた時期もある。そうすれば、会誌の編集の苦労も少し緩和されるのでは。役員任期・会費とあわせてサブ研活性化が鍵である。地域の活動の活発化も重要。若い人で非正規で大変でも、勉強したいという気持ちはある。その人たちのニーズもあるし、女性労働の専門誌もこ

このみなので使命があると思う。

- 研究会誌の編集委員をやっていたのが忙しかったけれど、やりがいもあった。どちらかといえば、会誌の拡大に重きがあったかもしれない。サブ研の活動を載せるというのはやり易いと思う。組織の担い手がなくなったというのは自分のときからも出てきた。一本つりというのも難しい。ほかの研究会でも同じようなことがある。疲れた時でも、サブ研に出ると勉強になりよかった。テーマを幅広く設ければ、研究例会にも人は来ると思う。
- 入会二年目、編集委員としても二年目。博士論文を終えて、自分の本棚にたくさんこの会誌があった。自分の関心を満たしてくれる会であると思って入会した。雑誌を面白くするのは重要。労働といっても雇用問題ばかり。もっと違う労働のとらえ方、生活とを包括的に捉えること、高齢女性の貧困とか話を広げた方がいいのでは。どういうテーマを取り上げたらいいのか、というアンケートをとったりして、そこからまた担い手を求めるというのもいいのでは。
- 10年、そのうち5年くらい読者であるのみ。専門委員というのをやってそれが違う制度となり編集委員・編集委員長となる。その際、研究会にどんな人材ソースがあるかわからなかった。住所録に関心のあるテーマを書いてもらえるといい。生まれた年をできれば聞き、住所録には掲載しないけれども年齢層ごとの関心を知ること大切ではないか。記事に解説を付けることも読みやすくする手立てかも。サブ研に関しては、担い手問題がある。サブ研と運営を担う人が重なり、双方の担い手不足ということもある。少数精鋭のサブ研を設けそこに人を投入したらどうか。会を運営していくためのマンパワーが不足している。
- 宿泊型の合宿をしたころに会員に。手作りの会誌を作ったころに編集委員をやり、その後運営委員をやった。その後担い手がおらず、再び運営委員さらには運営委員長に。「存廃」という言葉で今回話を引きついだ。声をかけても次々に断られる状況。これから自分としてどのように関わり、会のために何かしようと思っている人がどのくらいいるのか、がポイント。この会を続けるなら、NPO 法人にするべきでは。補助金が出るので、会費も下げられる。細々小さく、というのは難しいのでは。同じ人間がぐるぐる回ってやっていくことになる。今後やろうと思っている人がどのくらいいるのかが重要である。それによっては、循環を断ち切ることも必要になってくるのではないか。存続してほしいと思う人に参加してほしい。
- 参加したばかりで、委員をやり続け、その時にすでにサブ研は活動休止。大学図書館の中で会誌を見つけ、どうやって入会するんだろうと魅力的に感じていた。かつて魅力があったのはわかるが、今は楽しいというより人がいなくて大変。企画運営委員で活動できている人が少ない。「存廃」問題までいっても仕方がないと思う。人(役を担う)がいないう問題が差し迫っている。
- 出版労連などの活動をしていたり、会誌を見てどうやって研究会に入れるのかなと思っ

ていた。ここで勉強できるのは楽しかった。サブ研も妊娠出産と就労継続の問題を「職場の日ごろの問題を解決する会」でやってきた。職場で困っていることを吸い上げられるようなサブ研ができたらと思っていた。興味のある人はいるが、会費が高いと敬遠される。存廃に関して、切迫した思いが会員に伝わっていないのでは。もっと知恵を絞れるのでは。アンケートで全員に思いを聞いてみたい。

- 二年半前の夏のセミナーで大槻さんに誘われ入会した。文化人類学が専門で、労働を広い概念でとらえている。そういう意味で場違いかなと思うことも今でもある。会の歴史に個人的に興味があり、ライフストーリーの聞き取りもしてみたい。運営委員になり、いろいろとお話が聞けて個人的には面白かった。つないできた歴史は大事だと思うけれど、担い手不足の問題はいかんともしがたい。
- 神奈川の労働問題に関わる人がこの会に多く、声をかけていただいた。会にかかわって二年半、発言していいのかという思いもある。労働者と研究者とを切り結び、自分から発信できる会ということで魅力的。兼松裁判でもそうだった。編集委員として、切実に思ったことは会誌は研究会の顔。事務作業がかなりの量。品質管理の問題も大事。人の体制が整わなかった。労働者として、掲載レベルの判断も困難。経験のある常勤研究者が複数いないときつい。慣れていないと出来ないこともある。次の体制作りも悩ましい。任期に関して、融通をつけたらどうか。
- サブ研の活発化、・テーマが狭い。⇒労働・テーマを面白くすることが大切。労働と生活、人生をトータルにとらえる。・全国の会員の活動をどう活発化させるか、などのご意見があった。ただし、過去において、サブ研が活発化していた時期があったが、ここ何年かは停滞している。また、サブ研の内容を会誌に取り上げることも過去あったが、激論の末止めた経過もある。セミナーや会誌でとりあげるべきテーマについてアンケートをとっていた時期もあったが、それほど回答がこないということもあった。ご意見のいくつかは過去の方式にもどったほうがいいのかということなのでしょうかね？

住所録の更新必要かもしれない。女性労働は困難に直面している。昨年12月にでた世論調査によると92年比と比較しても職場で男性優遇と考える比率は高まっている。したがって研究会の存在意義はあるのだが。

- ①会誌のテーマ。1つは大きいテーマ。もうひとつはサブ研から。二段構えではどうか。
- ②やっている人は非常に活動をしている。その人たちを巻き込むことはどうか。
- ③小さくなくても続けることが大事。続けていると中興の祖が出る。どうやったら会誌を続けていけるのか、最低ラインを設けてはどうか。
- ④「労働」ということに関して、とらえ方を広げながら、でも主要なことをおさえながら、ということが出来ないか。「存廃」「廃止」ということを考えるのは時期尚早では。
- 私も年に3~4回会議にできればいいといわれて運営委員をひきうけたくち。野崎裁判のときに職務評価に森先生に関わっていただき、その後会員になった。ほとんどのセミナー

には参加してきたが、現時点で女性労働者の今の現状や関心を満たしていない。会誌は労働者にとっては難しい。研究者の人にとってはどうなのか。CEDAW 問題が動いているこの時期、研究会が何らか意見なり行動なり表明すべきでは？それを決定する仕組みがわからない。

- ・同一価値労働同一賃金の問題は自分がサブ研を立ち上げるべきかな、と議論を考えて思った。しかし、定年から 6 年、今の職場の問題の実感がわからない。かつての職場もコース別でもないのに、差別が隠ぺいされている。
- ・即戦力が必要。現実はこの会議に出席されている皆さんが本日お帰りになって次の担い手に電話をしていただくしかない。
- ・定年の人も活用してもらってはどうか。「定年退職後の女性」のサブ研もやりまとめたいくらい。現場を知らない引け目はある。
- ・現役といっても限られた経験。気にすることはない。
- ・一時「やはり現役よね」という雰囲気が漂っていたことがあった。
- ・今職場にいないと自分の職場をどうするか、という点において弱い。テーマにもよる。編集委員会にたとえばベテランのかたをアドバイザーとなってもらうなど、規約を変えてもいいのでは。
- ・職務評価（たとえばオランダについて）、オールドピープルの元気さ、などテーマになりうるのでは？
- ・品質と実働双方担うのがきつい。
- ・企画運営委員会が本来ならもろもろ担う場。それが機能していない。どのくらい担い手が本当にいるか。
- ・このままでは今に担っている人たちはやめる。
- ・私も定年退職組でも引き受けている。
- ・御案内状出すとき、もっと PR できないか。無理をおして頼まれてやると発想も貧困になる。
- ・もし一年か二年前ならもっと時間もあった、ということも自分にはあった。密かに今ならできる、何年後ならということもあるのでは。毎年その問い合わせを積み上げていく必要がいいのでは。今なら、サブ研と会誌の在り方も一から考え直せるのでは。
- ・サブ研の原稿の責任をだれが担うのか、という問題も発生する。もっと忙しくなるということもある。
- ・やりがいはあるかも。
- ・企画運営委員会はどうやって決まる？
- ・一本釣りで依頼している。会員の一人ひとりがやる気があるのか聞きたい。
- ・ここでアンケート委員会立ち上げたらどうか？
- ・名簿作りと一緒にアンケートをしたらどうか。
- ・こんなに運営している人は苦勞している、ということを知らせた上でやるといい。

- ・居城先生が最初の文面を作り、自分がアンケートを作る。それに二人くらい意見がほしい。村尾さんと山根さん頼みます。
- ・規約をゆるめるというか、動いてもらえる人をもっとこの際融通むげにできないか。
- ・推薦企画運営委員という制度がある。それに対応できるのでは。
- ・3月にたたき台を出して、6月に進めるという流れである。
- ・アンケートはいつごろまで？
- ・2月11・12日に確定する。
- ・封書にして切手ははってもらう。
- ・住所録はどうなっているのか。変更があった場合及び名簿と違う場合のみ返送してもらう。
- ・アンケート集約の結果また議論していく。